

# 令和2年度教育事業の評価について

○企画評価部会について

○評価結果（令和2年4月～令和3年1月の教育事業）

- 1 野外活動 〈夢冒険〉
- 2 発達支援 〈そにとキャンプ〉
- 3 教科等に関連付けた体験活動プログラム開発事業  
〈森林調査隊〉  
〈体力を高める運動～目指せ亀山登頂～〉

## 令和2年度 企画評価部会について

### 1、部会委員と主担当分野・事業

分野	主担当事業名	外部委員	担当
野外活動	夢冒険	伊原久美子 (大阪体育大学健康・ スポーツマネジメント学科 准教授)	◎高瀬 森本
発達支援	そにっとキャンプ	奥田博 (地球元気村 校長)	◎曾和 山内
教科指導	教科等に関連付けた体験活動プログラム開発事業	山中一希 (宇陀市立室生小学校 教諭) 福井美樹 (名張市立百合が丘小学校 教諭)	◎森本 ◎曾和

◎主担当

### 2、委員の役割

- ① 事業の企画・計画に対する助言、連携機関・団体の紹介
- ② 参加者募集のための広報に対する助言、協力
- ③ 事業の視察、講師・指導者として参画、講師・指導者適任者の推薦
- ④ 事業の評価
- ⑤ 事業の成果の発信
- ⑥ その他

# 評価・提案シート

## 1 野外活動〈夢冒険〉

評価委員名（伊原久美子）

事業名	夢冒険 2020
事業のねらい	④：適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切
特徴・工夫・努力した点	④：適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切
ねらいの達成度の評価	④：事業のねらいを十分達成し、期待どおりの成果を得た。 3：ほぼ事業のねらいを達成し、成果を得た。 2：事業のねらいに迫ることができたが、成果を得たとはいえない。 1：事業のねらいを達成できず、成果を得たとはいえない。
総評 (具体的な提案等を含む)	<p>*今年度は実施できたことが一番の評価 コロナ禍において、全国で多くの長期キャンプが中止となりました。私の大学の実習も日帰り開催となりました。夢冒険は全日程を開催したとのこと、それだけで快挙です。担当者の方のご苦労は大変なものだったと予想します。事業内容はもともと良く練られておりストーリーも良くできていますので、今年は実施できたことが何よりだったと思います。</p> <p>*コロナウィルス感染症対応について 今年も看護師さんが帯同されたとのこと。コロナウィルス感染症対策や暑さへの対応など看護師さんへの負担も大きかったでしょう。一部予定を切り上げて車両搬送した日があったと聞きました。決断はとても難しかったと思いますが、何よりも参加者第一で考えることが必要であり、大切な判断であったと思います。参加者には途中で歩けなかった悔しさもあると思いますが、キャンプの目的はすべてのコースを歩ききることではなかったはずです。失敗も含めて参加者には良い教材となるのがキャンプの教育力です。翌日、歩けなかった距離を少しでも取り戻したいという班があったとのことですから、そのようなこともチャレンジさせてあげられる寛容さがあったよかったですと思います。現場の判断を尊重したいと思いました。</p>

**\* 暑さ対策について**

担当者が述べておられましたが、仁柿峠を下りてからの気温が高く、日中歩かせられる状況ではないとのこと。WBGT計での温度把握、水分補給などいろいろ対策を取られたと思いますが、この時期に行うことが前提ならプログラムの再検討が必要かと思います。ボランティアスタッフにもかなりの負担がかかったようですので、ねらい、レベル設定、運営体制などをふまえて検討されたら良いと思います。

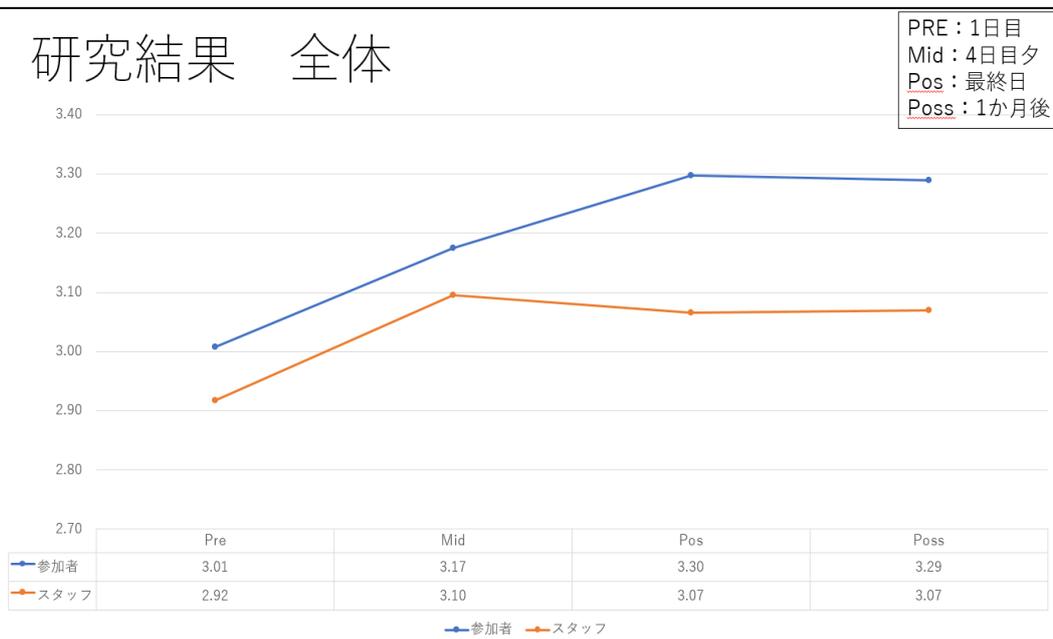
**\* 研究データから考える**

今回、「自尊感情」についてデータを取りました。この事業で狙った部分が数値的にどう裏付けられるのかを見ていきたいと思います。

自尊感情とは、「自分のできることできないことなどすべての要素を包括した意味での『自分』を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」（※東京都教職員研修センター 2012）を言います。これが高い方が「自立・自律」にもつながると考えます。

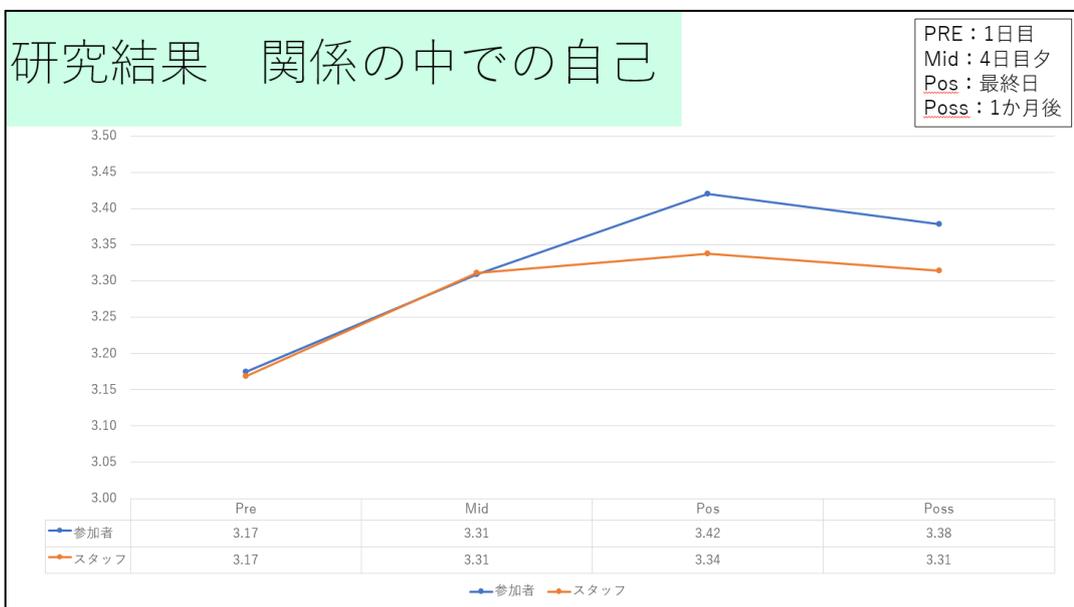
参加者、ボランティアともに上がり幅が大きく、キャンプ経験を通して自尊感情が高まったことがわかります。1か月後もそのまま維持されているのが特徴で、長期（1週間）キャンプの効果が表れていると思います。

## 研究結果 全体



そのなかでも「関係の中での自己」について注目しました。

これは、「グループのなかで自分自身をどのように表現できたか」がわかります。自由記述を見ると「みんなのためになることを考えて動いた」「自分の性格を破れた。がんばって自分の意見を伝えた」ということが書かれており、これらの言葉はまさに、



「自立・自律」の表れだと思えます。リーダーも参加者もともに有意に高まっており、この事業を通して参加者、リーダー共に効果があったことがデータからわかります。

#### \*ゆとりのあるスタッフ体制を

このような長期の事業では、当初の想定されない思いもよらないことが起きがちです。それこそがキャンプの教育力のタネだと思えますが、そのためにはスタッフや運営体制にゆとりが必要です。また、キャンプ全体に包容力も要ります。

過酷な環境の中でリーダーの疲労も大きかったことを反省点に挙げられています。かなりギリギリの状況でキャンプを行っていたのは容易に想像ができます。これを改善するためには、プログラムの見直し、スタッフ体制の再構築が必要だと思えます。夏休み期間でもありますから、施設を運営する傍ら、自然の家としてどれだけの人材をこの事業に投入できるかも重要なポイントになるでしょう。職員がかかわれないなら外部からのスタッフを投入する努力が必要だと思えます。長期事業はそれだけの覚悟が求められます。

でもこのデータを見たり、担当者の話をうかがったりすると、さすが国立施設ならではの運営ができていると感心します。そのうえで、安全にかつ質を高くするならば、次のステップのために見直しが必要な時期に来ているのだと思えます。リーダーがスキルアップできたことも評価ポイントに挙げられていました。参加者だけでなく、リーダーも育て上げていける青少年教育施設であり続けてほしいと思えます。

昨年も書かせていただいた「メンター」（担当者曰く、経験のある女性スタッフ）が設置できなかったとのこと。まさに「包容力」のために必要な機能です。次年度以降の課題にしてください。

\*まとめ

人生の進路にも影響のある多感な時期に、約半年近くをかけて行われる、このキャンプは国内でも珍しい、大切な事業だと思います。しかも、「移動型」「1週間」「夏・冬開催」「コロナ禍における体験」という点で今年は本当に貴重な取り組みとなりました。

冬の終わりの会で多くの参加者が「大きくなったらリーダーとして戻ってきたい」と述べたことは、リーダーにも自信になったことでしょう。この好循環は大切にされるべきだと思います。曾爾での様々な体験を通して優良な社会人が育つという地道な取り組みがまさに社会教育であり国立ならではの取り組みだと思います。学校生活で苦勞している子供が、自然の家の事業で輝いて自信をつけ、また日常へ戻っていく。そんな役割と機能をぜひこれからも果たして欲しいと思います。

新たなストーリーを考えることは、とても苦勞することだと思います。しかしながら、改めて地域（曾爾村やその周辺）や文化に目を向けてみるといろいろヒントがあるのではないのでしょうか。コロナ禍、気温の高さという制約がありますが、職員の皆さんの行動力と企画力に期待したいと思います。

## 2 発達支援〈そにとキャンプ〉

評価委員名（ 奥田 博 ）

事業名	発達支援「そにとキャンプ」
事業のねらい	④ 適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切
特徴・工夫・努力した点	4：適切 ③ やや適切 2：やや不適切 1：不適切
ねらいの達成度の評価	<p>4：事業のねらいを十分達成し、期待どおりの成果を得た。</p> <p>③ ほぼ事業のねらいを達成し、成果を得た。</p> <p>2：事業のねらいに迫ることができたが、成果を得たとはいえない。</p> <p>1：事業のねらいを達成できず、成果を得たとはいえない。</p>
総評 (具体的な提案等を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新型コロナウイルス感染拡大状況の中での実施であったため、活動内容等も制限されたが無事終了してよかった。</li> <li>・ ここ数年応募者が少ない要因の一つとして、発達上の特性を有する子どもたちへの支援が浸透してきたため、曾爾青少年自然の家の事業が唯一でなくなったということも考えられる。(他の青少年教育施設や民間団体等の支援活動が活発化している。)このことから、他の施設・団体には無い特徴のある「そにとキャンプ」の構築とその広報が望まれる。</li> <li>・ 本事業は冒険的体験プログラムを基盤に企画されているが、参加者の特性に対応しているかの検討が必要だと考える。 最近、多動性傾向の参加者が少なく、コミュニケーションに特性のある子どもが多くなっている。体験プログラムの中に、コミュニケーショントレーニングを組み入れることも検討してほしい。</li> <li>・ そにとキャンプの特徴の一つに、このキャンプの成果を継続させるための保護者の会の活動がある。これまでも自然の家の支援があって連携した活動が行われている。より拡大した支援組織の構築が望まれる。</li> <li>・ 参加者それぞれの特性に対応したキャンプの実施は困難であるが、スペシャルニーズとしての対象者の絞り込みが必要と考える。</li> <li>・ 個人的な考えではあるが、より高度な達成感や充実感を得るためには、自然の家の事業「夢冒険」のような長期の宿泊体験キャンプを望みます。</li> </ul>

### 3 教科等に関連付けた体験活動プログラム開発事業

評価委員名（ 福井 美樹 ）

事業名	教科指導「教科等に関連付けた体験活動プログラム開発事業」 5年社会科「森林調査隊」
事業のねらい	④ 適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切
特徴・工夫・努力した点	4：適切 ③：やや適切 2：やや不適切 1：不適切
ねらいの達成度の評価	④：事業のねらいを十分達成し、期待どおりの成果を得た。 3：ほぼ事業のねらいを達成し、成果を得た。 2：事業のねらいに迫ることができたが、成果を得たとはいえない。 1：事業のねらいを達成できず、成果を得たとはいえない。
総評 (具体的な提案等を含む)	<p>○実際に森の中に入り、自然の家職員の説明を受けながら、触れたり、見たり、体験したりすることに意義があった。</p> <p>○子どもたちが、興味津々で形の異なる葉っぱや動物の足跡を探したりするなど自ら進んで取り組むことができた。</p> <p>○学校での事後の振り返りでは、「自然林、人工林について知ることができて楽しかった」「木を切ることは、自然破壊だと思っていたことが林を豊かにすることにつながるということがわかった」などの感想があり、学んだ内容についてどの子もしっかりと話すことができるとともに新聞にまとめることができた。</p> <p>○間伐材を使った丸太切り体験など、達成感を味わうことができる活動もあった。</p> <p>●本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により、5月に1泊2日で実施する予定であった宿泊体験学習が11月の日帰りでの体験学習となった。中止も考えられる状況下で、自然の家担当職員からの連携についての説明が不十分であったために、プログラムの相談等に遅れが生じた。また、日帰りでの実施で時間に余裕が無く、グループでの話し合いの時間も十分ではなかった。主体的・対話的で深い学びにするためには、プログラムの精選が必要であった。</p>

<p>事業名</p>	<p>教科指導「教科等に関連付けた体験活動プログラム開発事業」 5年生体育科「体力を高める運動～目指せ亀山登頂～」</p>
<p>事業のねらい</p>	<p>④：適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切</p>
<p>特徴・工夫・努力した点</p>	<p>④：適切 3：やや適切 2：やや不適切 1：不適切</p>
<p>ねらいの達成度の評価</p>	<p>④：事業のねらいを十分達成し、期待どおりの成果を得た。 3：ほぼ事業のねらいを達成し、成果を得た。 2：事業のねらいに迫ることができたが、成果を得たとはいえない。 1：事業のねらいを達成できず、成果を得たとはいえない。</p>
<p>総評 (具体的な提案等を含む)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の特性を踏まえ、ねらいに即した活動の企画運営をしていただけた。</li> <li>・スタッフの方に内容を提案していただけたおかげで、よりよいプログラムとなった。日常では体験しにくい活動を安全な指導のもと実施できた。その一方、次年度の活動の方向性を決めてしまうことで、プログラムに制限がかかるのではないかという不安な点も感じられた。個人的にはスタッフの方々との連携は大変助かったが、同様に進めていくには、密に連絡を取り合う必要があると感じている。</li> <li>・主体的・対話的な学びに関しては、活動自体は個々のものとなったため心配もあったが、測定での様子や振り返りの中で友人とのつながりを得ることができたと感じている。</li> </ul>